

「幻家」

ワカハラダイスケ

○人物

- ・高柿功 (14) …小説家
- ・高柿退助 (19) …功の息子。浪人生
- ・高柿由美子 (22) …功の妻
- ・高柿蜜柑 (14) …功の娘。中学生
- ・謎の女 (24)
- ・島縞和弘 (28) …編集者
- ・夏目高像石 …由美子の先輩
- ・大宰府治 …由美子の先輩

舞台イメージ補足（初演時の構造です）

舞台上手に、リビングテーブルと4脚の椅子。下手にはいくつかの木箱が配置されている。舞台前面はフリースペースとして活用。上手と下手にはけ口が1つずつ配置されている。物語の進行に応じて舞台装置の配置を役者が切り替え、舞台は様々な場所に变化する。

1 高柿家・功の部屋（昼）

高柿功（正）と島縞和弘（28）が机を挟んで話している。

島縞はノートを見ながら唸っている。功はふんぞり返って不機嫌さを隠そうともしない。

島縞「先生、この場面なんですが」

功「なんだ」

島縞「主人公は自分を捨てた母親に恨みを抱えていたんですよ？」

功「うん」

島縞「じゃあ、なんで母親が死ぬ場面で涙を流すんですか？ え、心変わりする場面ありましたっけ？」

功、ため息をつく。

功「君はそれを本気で言ってるのか？」
「28ページを見てみる」

島縞「えーと、主人公が立ち寄ったタイ料理屋でタコライスを」

功「ガパオライスだ」

島縞「ああ、そうガパオライスを食べるんですって。え、なんでそれが？」

功「君はバカか！ 故郷のタイにいる母親の料理をその味で思いだすんだよ！！」

島縞「いやいや、捨てられた復讐心はガパオライスで無くならないでしょう。なんすか、その復讐」

功「無くなるんだよ、それぐらい主人公にとってガパオライスは尊い存在だったんだよ！！ 大体日本に来て間もない時に王将のチャーハンを食べ、しっくりきてない描写もあっただろ！ それが伏線なんだよ！」

島縞「いや、わかんないですよ」

功「なんだと？」

島縞「先生の作品はなんていうか登場人物が心に秘めすぎなんですよ。」

気持ちには言葉に出さないとわからないでしょ。読者にとってタコライ
スはどこまでいってもタコライスなんだから」

功「ガパオライスだ」

島縞「はい、ガパオ」

功「人間は言葉に表出するものだけがすべてじゃないというのが私の信
条だ」

島縞「そりゃそうですけど、限度がありますよ。先生、ミステリー作家
としては、優秀ですけど、こういう人情的な脚本を描くのには向いて
ないと思うんですよね」

功の顔が次第に険しくなる。

島縞「こう：なんていうのかな。全体的に内に閉じこもりがちというか。
こういう人情に訴えかけるシナリオなのに登場人物のエネルギーが外
に出てこないんですよねー。いや、小説ならわかりますよ？ 地の文
があるからいくらでも内面描写は描けるんですけど、でもこれ漫画の
シナリオですからね？ 行動で示してくださいよ。行動で。往年の名
作家が漫画原作に挑戦！ という触れ込みなんですから。先生って人
付き合い不器用な面あるじゃないですか？ それが作品にも表れてま
すよね。昔ならそれをくみ取ってくれる人も多かったですけど、
最近はライトにわかりやすい作品が世間でも求められてますからねー。
まあ結論をいうと、今のままだと結構作家として致命的……」

功「出ていけー……」

島縞、慌てて功の部屋を出ていく。

2 高柿家ーリビング(昼)

リビングで高柿由美子(15)が料理している。何かを揚げて
いる音。高柿蜜柑(14)と高柿退助(16)がテーブルに座
っている。

蜜柑「出ていこうかな」

退助「どうしたんだよ、急に」

蜜柑「お父さんと同じ空気吸いたくないんだよね」

由美子「あんた空気吸わないでどうやって生きる気？ 人間やめる
の？」

蜜柑「お母さん、比喻ってわかる？」

退助「出て行ってどうするんだよ」

蜜柑「アイドルになるの！ なんとか48のグループに入って人気にな
るも、スキヤンダルで一特別グループに左遷されるけど、持ち前のト
ーク力で人気をあげて、総選挙で第一位になってね、華々しく卒業し
て、億稼ぐ女になる」

退助「いやに具体的だな」

由美子「億稼いだら、お母さんに貢いでね。お昼できたわよー」

由美子がテーブルに皿を並べる。

蜜柑「やったー！ 今日焼きそばじゃーん！ いただき」

由美子「あ、ストップ」

蜜柑「ん？」

由美子、焼きそばの上に揚げたてのカツを載せていく。

蜜柑「ちよーーーっ！ ちょっとまって！ なにこれ！？」

由美子「カツ焼きそば」

蜜柑「違う、そうじゃなくてなんで焼きそばの上にカツを載せるの？

焼きそばでしょ？ いらなくない？」

由美子「退助が受験に勝つためのゲンかつぎよ。我慢しなさい」

退助、呆れた顔をして渋々食べ始める。

蜜柑「やだよー。てか昨日もカツ丼だったじゃん。ダイエット中なのに

…」

由美子「受験が終わるまで続けるからね」

蜜柑「え！？」

退助「蜜柑、もうあきらめるよ。母さん言い出したら聞かないから」

蜜柑「お兄ちゃん、絶対合格してよ。これで受験落ちたら絶交だからね」

由美子「明日はカツンジャオロースにしようかしら」

退助「最悪だ：」

功が下りてくる。蜜柑と退助、急におとなしくなる。

由美子「さっき和弘さんが慌てて出ていったわよ。打ち合わせはもういいの？」

功「無駄だ。無駄。あいつに俺の気持ちが変わってたまるか」

由美子「そんなこと言って。久々にもらったお仕事なんじゃないの？」

功「：何とかするよ」

功、テーブルに座る。

功「今日は焼きそばか」

由美子「カツ焼きそばよ」

功「そうか。いただきます」

功、もくもくと食べ始める。

蜜柑「（小声）なにかツツコめよ」

功「何か言ったか？」

蜜柑「何でもありません」

功「そういえば退助」

退助「なに？」

功「ちゃんと勉強は進んでるのか？ 変な漫画でも描いてるんじゃないだろうな」

退助「変なっぺなんだよ」

功「勉強は進んでるのか？」

退助「やってるよ、うるさいなあ」

功「おい。なんだ、その態度は。大体お前は浪人生なんだぞ？ 親の金で生きているなら：」

退助「ごちそうさま」

功「おい！」

退助、功を無視してリビングを出ていく。

功「なんだあいつは」

由美子「あなた、言い方に気を付けなさいと」

功「俺は間違ったことは言っとらん。それより蜜柑」

蜜柑、びくつとする。

蜜柑「なに？」

功「お前、その化粧はなんだ」

蜜柑「え、オルチャンメイクだけど」

功「オルチャンメイクだかコボちゃんメイクだか知らんが、その年で化粧はやめろ。みっともない」

蜜柑、明らかに不機嫌そうな顔をしながら

蜜柑「はーい」

功「まったく…うちの子はどうしてこう…ごちそうさま」

功、出ていく。蜜柑、功が出ていく様を見届けた後、息を吐き出す。

蜜柑「はーい。息がつまる。もうー、最悪」

由美子、苦笑しながら蜜柑の横に座る。

由美子「お父さんも仕事がうまくいかなくて気が立ってるのよ」

蜜柑「だからってうちらに八つ当たりしないでほしいよ、お父さんはうちらのこと嫌いなんだよ」

由美子「あら、お父さんあれで可愛いところあるのよ」

蜜柑「はい出た！お母さんはいつもお父さんの肩持つよね！癒着だ癒着！！」

由美子「あんた、どこでそんな言葉覚えたの」

蜜柑「テレビでいった。お父さんってお兄ちゃんと仲悪いし、息苦しんだよね、最近」

由美子「じゃあお母さんから一つミッションを与えましょう」
蜜柑「え、なに」

由美子、急に威厳ある口調になる。

由美子「蜜柑くん。このままでは我が家庭は崩壊を免れない。そこで貴様にはお父さんがお兄ちゃんと仲良くできるように諜報活動をしてほしい」

蜜柑「やだよ、めんどくさ」

由美子「おや、こんなところにお小遣いが」

蜜柑「サーイエッサー！」

由美子「いい返事だ。これから貴様のことはオレンジ1と呼ぶ、私のことはマザー1と呼べ」

蜜柑「まずは何をすればよろしいでしょうかマザー1」

由美子「まずはお父さんのことを知ってみる努力からしてみよう。敵を知り、己を知れば百戦危うからずだ」

蜜柑「えーと、具体的には？」

由美子「お父さんの部屋に入ってみたら？」

蜜柑「え」

3 高柿家―廊下（昼）

スパイ映画のような緊張感を表現する照明と音響の中、蜜柑が功の部屋の前に入る。BGMが流れる。

蜜柑「というわけで来たものの。絶対お父さん、部屋に入れてくれないよね」

ここで蜜柑が持つてるトランシーバーから由美子の声が聞こえる。

由美子の声「オレンジ1、こちらはマザー1、オーバー」

蜜柑「マザー1、こちらオレンジ1。部屋の前に来たが、ターゲットが部屋の中に入れて入りにくい。指示を願う。オーバー」

由美子の声「オレンジ1、こちらマザー1。適当な理由をつけてターゲットを部屋から出せ。オーバー」

蜜柑「マザー1、こちらオレンジ1。ラジャー。通信アウト」

蜜柑、トランシーバーをしまい、功の部屋に向かって叫ぶ。

蜜柑「お父さん」

功の声「執筆中は声をかけるなど言ってるだろ」

蜜柑「お母さんが倒れちゃった！！」

功の声「なに！？」

由美子の声「え？」

蜜柑「なんかね、急に口から血がふしゃーって！！ 血がダラダラでヤバイよ！！ なんか変なうわごとを言ってるし、穴という穴から変な液体が出てゾンビみたいに…！ お母さんが死んじゃううううう」

間。功が部屋から飛び出てくる。

功「由美子！！ 大丈夫か！！」

蜜柑「こちらオレンジ1。マザー1、健闘を祈る」

由美子の声「ちよっと！！！！」

ブツッと通信が切れる音。

蜜柑「さて…と」

4 高柿家―功の部屋（昼）

蜜柑が功の部屋に入ってくる。じろじろと周りを見回す。

蜜柑「お父さんの部屋：こんななんだ」

蜜柑、功の椅子に座る。

蜜柑「めっちゃいい椅子。：（声色を変えて、手をろくろみたいにする）私はね、人間というものは言葉に表出するものだけがすべてじゃないというのが信条だね。（我に返り）違う、こんなことにきたんじゃない」

蜜柑、椅子から立ち上がる。本棚を眺め。

蜜柑「エロ本とかないか、エロ本やーい」

蜜柑、本棚から本を取りだし、見ていく。

蜜柑「難しい本ばつか：、お父さん、やっぱり頭いいんだな」

蜜柑、本を眺めながら、ぼつり。

蜜柑「私、何にも知らないや」

蜜柑、本を戻して机の上を見る。

蜜柑「きたね。整理しろよなー。：ん？ これって：」

功の机の上から何かの絵が飾られているのを発見する。

蜜柑「これ：何の絵？」

功の声が聞こえてくる。

功の声「おい蜜柑！ お母さんピンピンしてるじゃないか！ 変な液体も出てないぞ！ どういうことだ！」

蜜柑「やっぱ！」

功、部屋に入ってくる。蜜柑と鉢合わせる。

蜜柑「あ」

功「お前：何をしてるんだ」

蜜柑「いや、えーと：お父さんこれって…」

功、蜜柑が持った紙を見て仰天する。

功「お前、それを見たのか！？」

蜜柑「え、なんなのこれ」

功「べ、別に何でもない」

蜜柑「なんでもないってことはないでしょ」

功「うるさい！ なんでもない！」

功、蜜柑を無理やり部屋からだそうとする。

蜜柑「ちょっと、痛い痛い！？ これ返すから」

功「そんなもんいらん！！」

功、部屋から蜜柑を出し、ドア元で

功「ここで見たことは他言無用だ、いいな」

蜜柑、功の迫力に気おされ

蜜柑「う、うん」

5 高柿家ーリビング(昼)

蜜柑がげっそりした表情で由美子の待つリビングに戻ってくる。

蜜柑「死ぬかと思った」

由美子「自業自得よ。で、どうだった？」

蜜柑「何にもない、わけではなかった」

蜜柑、絵を広げる。

由美子「なにそれ」

蜜柑「わかんない…」

蜜柑「お母さん。私、もっとお父さんのこと知りたい」

由美子「やる気でてきたみたいね」

蜜柑「あのさ。お父さんてさ、お母さんとどういう関係だったの」

由美子「あれ、言ってなかったっけ」

蜜柑「聞きたい聞きたい」

由美子「えーとね、あれは大学するとき…」

舞台の照明が変化。舞台下手から若かりし頃の功(21)と由

美子(16)が現れ、椅子にすわって、小説を読み始める。こ

こから、過去の功と由美子の話が舞台上で再現される。(舞台

上にいまの蜜柑と由美子も残っている。あくまで由美子が蜜柑

に話を聞かせてあげている体)。

由美子「お母さんはね、当時、文芸サークルに所属していたの」

蜜柑「え。お母さん本とか読むの？」

由美子「昔はね。父さんはそのサークルの先輩だった。いつも仏頂面で

難しそうな本を読んでばかりで、正直誰も近づかなかった」

蜜柑「ダメじゃん。母さんは？」

由美子「普通にサークルの友達と本の話をしたり、講義と一緒に受けた

り…でも、当時困ったことがあってね」

蜜柑「ほう」

舞台下手から夏目高像石(20)と大宰府治(20)がやってくる。

夏目高と大宰府はそれぞれ作家のような出で立ち。蜜柑、思わ

ず目を見張る。

蜜柑「うわ、なんかすごいきた」

由美子「夏目高さんと大宰府さんっていう二人の先輩に言い寄られてたの。先輩だからあまり無碍にもできなくて」

大宰府が学生由美子の隣に座る。

大宰府「恥の多い生涯を送ってきまして」

学生由美子が苦笑をする。

学生由美子「落ち込んでますね、大宰府さん。単位また落としそうなんですか？」

大宰府「慰めてほしいな、由美子さんに」

大宰府が学生由美子にすりよる。

学生由美子「こ、困ります」

夏目高が大宰府の反対側に座り、学生 由美子を囲む形となる。

夏目高「由美子さん、月が綺麗ですね」

学生由美子「昼間ですけど……」

大宰府「夏目高くん、お坊ちゃんな君に由美子さんを娶る資格はない」

夏目高「大宰府くん、君のような人間失格者に由美子君をたぶらかす権利はない」

大宰府と夏目高がにらみ合う。

蜜柑「わお、お母さんモチモチじゃん」

由美子「やめてよ、二人は先輩だったから、私も断りづらくてね。でもそこに……」

学生功が読んてる本を閉じる。

学生功「悪しき作家とは、読者に理解できない自己の内部での文脈を考慮に入れながら書く連中である」

大宰府と夏目高が功の方を向く。

学生功「僕の好きな作家の言葉だ。誰にも理解できない文脈でナンパする君たちは、まさしく悪しき作家だな」

大宰府と夏目高が激昂して立ち上がる。

大宰府「なんだお前は。君には関係ないだろう」

大宰府が功から本を奪い取り、投げ捨てる。

学生功「貴様！！ それでも誇りある文芸サークルの一員かー！！」

学生功が大宰府と夏目高に殴りかかる。

蜜柑「うわあ！ お父さんがケンカしたの！？」

由美子「お父さん、その時から血気盛んだったから」

蜜柑「じゃあ、それで二人をぼこぼこにしたんだね」

由美子「されたの」

蜜柑「え」

学生功が倒れる。大宰府と夏目高は無傷。唾を吐き捨てながら舞台を去っていく。

蜜柑「（思わず声が漏れるように）だっさ」

学生由美子が倒れる功に駆け寄る。

学生由美子「あのう、大丈夫ですか？」

学生功がよろよろと体を起こす。

学生功「あ、あいつらは」

学生由美子「帰っていきましたよ。ありがとうございます。なんか色々うやむやになって、結果たすかりました」

由美子の顔を見て固まる功。

学生功「そ、そうか。いや、いい。僕は読書に集中できなかったから、追い払っただけだ」

学生由美子「え、そうなんですか」

学生功「そうだ。すまないがもう大丈夫だ。読書に戻るよ」

学生功が椅子に座って読書を再開する。だが、本が上下逆さまになっていることに気付かない。学生由美子がそれに気づき、

学生由美子「あろう」

学生功「なんだ」

学生由美子「本が上下逆さまですけど…」

学生功「え、あ、うわ」

学生功、慌てて上下を元に戻して、本を読み返す。由美子、クスクスと笑い

学生由美子「もしかして緊張してます？」

学生功「し：知らん！！」

蜜柑、学生功の方を向いて

蜜柑「お父さんもかわいいところあるじゃん。素直に好きだから助けたっていえばいいのに」

由美子「どう？ お父さんのこと、少しわかった？」

蜜柑「まあちよつとだけね」

学生功と学生由美子が舞台から去る。

蜜柑「お父さんって不器用だけどさ。悪い人じゃないんだね」

由美子「今更？」

蜜柑「次はお兄ちゃんにも話聞いてくるね。

お父さんのことどう思ってるか！」

蜜柑、敬礼をして舞台を去る。由美子、敬礼して返す。

由美子「健闘を祈る」

ベッドで寝ている退助。寝言をぶつぶつとつぶやいている。

退助「ああ、先輩…」

そろりそろりと近づいている蜜柑。その手には退助が描いた漫画の原稿が握られている。

退助「え、そんな：僕まだ19歳なんですよ。先輩、そんなああ。そんなに近づいたら僕…、僕…」

蜜柑、退助の顔ぎりぎりまで近づいて

蜜柑「おきろー！ー！ー！ー！！」

退助「うわあああああああ」

飛び起きる退助。

退助「え、なに？ なに？」

蜜柑「もう昼だよ、てか何の夢見てたの」

退助「え、いや：それは…」

急にもじもじする退助。

蜜柑「照れるな、キモイ。お母さんが昼飯できたから、そろそろ降りてこいって」

退助「わかったよ」

退助、ベッドから降りると、蜜柑が持っている漫画の原稿に気づく。

退助「お前それ」

蜜柑「ああ、これ？ お兄ちゃん起きるまで暇だから読んでた」

退助「ちよ、おま！ かーえーせーよー」

蜜柑「やーだよー」

退助、蜜柑を追いかける。蜜柑、退助を華麗にかわす。

蜜柑「てかさ、これめっちゃ面白いよね」

退助の動きが止まる。

退助「え、そ、そう？」

蜜柑「うん、私あんまり漫画のことわからないけど、なんか読んでてテンションあがる」

退助「そう！ そうなんだよ！ こう、テンションが上がるわかりやすく面白い漫画を目指しててさ！ よかったー、伝わって！」

蜜柑「兄ちゃんにこんな才能があったなんてなー」

退助「まあ父さんがキツカケなんだけどな」

蜜柑、仰天して退助に近づく。

蜜柑「え、お父さんが？」

退助「小学生の頃なだけどさ」

またしても舞台の照明が変化。舞台下手から小学生の退（10）と若かりし功（9）が現れる。ここから、退助の過去の話が舞台上で再現される。（舞台上に退助と蜜柑も残っている。あくまで退助が蜜柑に話を聞かせてあげている体）。幼い退助が自分が描いた絵を持って、功のところへ歩み寄る。功はパソコンを叩いている。

幼い退助「ねえお父さん」

功、振り返る。

若い功「なんだ」

幼い退助「今日ね、学校でお父さんの似顔絵を描いたら、先生に褒められたの」

若い功「ほう」

幼い退助「お母さんにも見せたら、すごくうまいって言ってくれたんだ」

幼い退助が功に自慢気に絵を見せる。功、絵を受け取り、じつと眺める。

若い功「ふむ、なるほど」

得意げな表情で功を見つめる退助。蜜柑が和んだ顔でその様子を見守る。

蜜柑「ふふ、なんかほのぼのしちゃうね」

若い功が微笑みながら、幼い退助に

若い功「下手だな」

驚愕の表情を浮かべる幼い退助と蜜柑。

ここで幼い退助と若い功はストップモーション。蜜柑は理解が追いつかないといった様子。

蜜柑「え！？ ちょ、え！？」

退助「はっきり言われたよね。あの時は」

蜜柑「いや！ そうじゃないだろ！？ そこは嘘でも『よく描けたね』って言えよ」

退助「父さん、お世辞とか言わない、いや言えないからさ」

蜜柑「我が父ながら最低だわ」

退助「でも、この話には続きがあるんだ」

蜜柑「え？」

幼い退助と功がまた動き出す。幼い退助が絵を描いて、功に見せる。

幼い退助「見てー」

功が退助から絵を受け取る。

若き功「少しマシになったが、まだダメだな」

幼い退助「くっそー」

退助、また戻り、絵を描いては功に見せる。これを何度か繰り返し返す。

幼い退助「どう!？」

若き功「目と鼻が離れすぎだ。俺の顔をよく見ろ」

幼い退助、また絵を描く。また功に見せる。

幼い退助「どう!!??」

若き功「線が雑だな、ミミズみたいだ」

幼い退助、またまた絵を描く。またまた功に見せる。

幼い退助「どう!!??」

若き功「陰影のつけ方がおかしいな。入射光がどこから射してるのかを計算しろ」

蜜柑「小学生にどこまで求めるんだよ」

幼い退助、またまたまた絵を描く。

幼い退助「どう!!!!??」

功、絵を受け取る。じっくり見て、

若き功「よく描けてるじゃないか」

幼い退助、その言葉を聞いて喜ぶ。

幼い退助「やったーーーー!!!」

ここで照明が元に戻る。

退助「まあ、そんなわけで、気づいたら俺は絵を描くことが好きになっていった」

蜜柑「父さん…、もしかしてそれを狙って?」

退助「父さんなりに俺を応援してくれたのかもな」

蜜柑「その絵ってさ、結局どうしたの」

退助 「父さんに渡して、それつきりだな」

蜜柑 「もしかして…」

退助 「ん？」

蜜柑 「あー…うーん。なんでもない。えーと、じゃあお兄ちゃんはお父さんのこと嫌いじゃないってこと？」

退助 「父さんは俺のこと嫌いだと思うけどな」

蜜柑 「そんなこと…ないと思う」

退助 「え、どうしたんだよ。お前急に」

蜜柑 「なんでもないのであります」

蜜柑 「てかき、お兄ちゃん、そんなに漫画が好きなら投稿とかしたらいいじゃん」

退助 「うーんまあ、それを送ろうと思うんだけど…最後の台詞がどうしても思い浮かばなくてさ…」

蜜柑 「ええー。そんなの適当に書いちゃいなよ！」

退助 「ダメだ！！そこはしっかり考えたいんだ」

頭を抱える退助。間。蜜柑が立ち上がる。

蜜柑 「そうだ！父さんに見てもらえればいいじゃん！」

退助 「ええっ!？」

蜜柑 「いまは鳴かず飛ばすだけどさ。一応プロの作家なわけじゃん！絶対なんかいいアドバイスくれるって！」

退助 「いやいやいや、無理だって！！絶対怒られるって」

蜜柑 「漫画家、なりたいんでしょ？」

蜜柑が真剣なまなざしで退助を見つめる。

退助 「う…」

蜜柑 「気持ちをはっきり伝えよ」

蜜柑が原稿を退助に渡す。退助、戸惑いながら受け取る。

7 高柿家ーリビング(昼)

合格祈願のハチマキを巻いた由美子と功が踊っている。途中から退助と蜜柑が入ってくるが、異様な光景に若干引いている。やがて踊りが終わり、

蜜柑「…何してんの」

由美子「合格祈願の踊りよ」

蜜柑「はあ？」

由美子「退助だけ受験勉強で大変なのって不公平でしょ？　そこでお母さん考えたの。退助が合格するまで毎日この踊りを続けて、退助と一緒にこの受験を乗り切るの！　ねえ、お父さん」

功「ああ」

功、まじめに振り付けの練習をしている。

蜜柑「お父さんまで…」

退助が蜜柑に耳打ちする。

退助「蜜柑、やっぱりやめよう」

蜜柑「なんでよ、ここまできて」

退助「なんかここまで盛り上がってるのに今更言いにくいよ…」

蜜柑「漫画家になりたいんでしょ、しゃんとしなよ」

退助「うーん…」

蜜柑、由美子と功の前まで歩み寄る。

蜜柑「お父さん、お母さん！　お話があります！」

功「ほう」

由美子「なあに、あらたまって」

功と由美子、蜜柑の方に振り返る。

蜜柑「あ。私じゃなくてお兄ちゃんから」

退助「え」

蜜柑、退助の背中を押す。退助、緊張した面持ちで功と由美子の前に立つ。

退助「あ、あの…さ」

退助、原稿を持ちながらもじもじとする。緊張でうまくしゃべることができない様子。

由美子「どうしたの、退助」

功「何があった」

退助「俺さ…あの…」

功「はつきり喋らんか！」

退助「俺、漫画家になりたい！！！」

間。功の表情が陰しくなる。

退助「ずっと、ずっと考えてたんだ。昔から絵を描くのが好きで、こっそり描いてたんだ。漫画を描いてるときが一番充実してることになり気付いたらさ…、もう受験勉強にどうしても集中できなくて。俺がやりたいことはやっぱり漫画なんだよ」

退助、震えながら原稿を取り出し、功の前に出す。

退助「これを父さんに読んでほしい」

功、無言で原稿を受け取る。

退助「最後のセリフが思い浮かばなくてさ、アドバイスももらいたくて」

蜜柑「お父さん、お願い！ お兄ちゃんの気持ちを受け取ってあげて！」

由美子「え、え、ちよっと待って。退助、受験はどうするの？」

退助「受験は…あきらめたい」

由美子「ええっ！？」

退助「本気で漫画家を目指すために、漫画を描き続けたいんだ。最初はアシスタントとかになるかもだけど…」

由美子「そんなこと急に言われても…」

退助「お願いだよ！！ 俺の人生なんだ。父さんと母さんには迷惑をかけるから、だから」

功「ふざけるな！！！！」

功の一喝で場が静まりかえる。

功「さつきから聞いていればなんだ。青臭い夢をベラベラしゃべりおつて。お前はつらい受験から逃避したいだけだ。漫画家、いや何かを生み出す仕事というののはな、生半可な覚悟でできるものじゃないんだ」

蜜柑「なによそれ！ 父さんだって作家とかやってるじゃん！」

功「お前は黙ってる！」

退助「逃避じゃない！ 俺の漫画を読んでくれればわかる！！ 俺は本気なんだ！」

功「いや、読まなくてもわかる。：お前には才能がない」

功、退助の原稿を床に投げ捨てる。

蜜柑「ちよっと！」

由美子「あなた：！？」

功「いいな、今は全てを忘れて勉強に集中しろ。それがお前のタメなんだ」

功、部屋から出ようとする。

退助「：拾えよ」

功、立ち止まる。

功「なんだと？」

退助「拾えっていつてんだよ！！」

退助、功につかみかかる。功ともみ合いになり、退助が功に対して馬乗りになる。

由美子「退助やめなさい！」

蜜柑「お兄ちゃん！！」

退助「売れない作家のくせに説教するんじゃないよ！！」

功「なんだと！？」

退助、功の顔を何度も殴りつける。功、なんとか退助を振りほどく。

退助「いつも上から怒鳴るだけで…、あんたは俺たちのことなんてどうでもいいんだろ!!」

功、その言葉に反応して、退助を殴りつける。

功「もう知らん。好きにしろ」

功、ドアを開けてリビングを出ていく。退助、起き上がる。

退助「ごめん、母さん、蜜柑…」

退助、そのままリビングを出ていく。

蜜柑「兄ちゃん!」

由美子「ああ、もう」

由美子が部屋を片付け始める。

蜜柑「お母さん：私、やっぱりお父さんのことわかんないや」

由美子「蜜柑：違うの、お父さんはね」

蜜柑「何が違うのよ! もういい!」

蜜柑が出ていく。由美子、ため息をつきながら、部屋を片付ける。そして、何かに気付いて、功が出ていった先のドアを開けると、功が三角座りをして縮こまっている。

由美子「うわあっびびっくりした、何してるのお父さん」

功、ぼそぼそと何かつぶやいている。

由美子「え、なに? 聞こえないんだけど」

功「…に：られた」

由美子「え!? なんて?」

功「退助に殴られた!」

間。

由美子「そりゃあ殴られるわよ、あんな言い方をしたら」

由美子が功の手を引っ張って立ち上がらせ、テーブルに座らせる。
る。

功「俺ってダメな父親かな」

由美子「ダメかは知らないけど、さっきの言い過ぎだったかな」

功「退助には大学に行ってほしいんだ」

由美子「うん：なんで？」

功「あいつは夢しか見ていない。大学をけったその先で：漫画家になれなかつたらいや、漫画家になれたとしても、その先で失敗したら：。もう引き返せないんだぞ」

由美子「うん」

功「昔、売れても今は鳴かず飛ばずの作家で、シナリオもろくに書けない。かといって、文字を書くこと以外のことは何もできない：そんな男になってほしくないんだ：！」

由美子「あなた：」

功「すまん、顔を洗ってくる」

由美子「悪しき作家とは、読者に理解できない自己の内部での文脈を考慮に入れながら書く連中である」

功、振り返る。

功「おい、それ」

由美子「退助にいま私にいったこと、そのまま伝えなさいよ」

功「ああ」

8 高柿家―退助の部屋の前（昼）

退助の部屋の前に立つ功。緊張の面持ち。ノックをする。

功「退助」

部屋から返事はない。功、ため息をつく。もう一度ノック。

功「退助！ 話したいことがあるんだ、出てきなさい！」

退助、なおも無言。功、思わず強めにノックし、

功「おい！ いい加減に…！！（はっとなり）いや、違う。すまんすまん。あー、冷静に話し合おう。な、退助」

退助の部屋からは何も聞こえてこない。風の音が聞こえてくる。

功「窓でも開けてるのか…？ いいか、入るぞ」

功、恐る恐るドアを開ける。だが、そこには退助の姿はなく、窓が開いているだけ。

功「退助…！？」

9 路上（夜）

功と由美子と蜜柑が外で集まっている。

由美子「部屋にいなかったってなんで!？」

功「書置きがあった。窓から抜け出して家出したんだ」

蜜柑「お父さんのせいだよ」

由美子「蜜柑!」

功「…今は退助を探すんだ」

功と由美子と蜜柑がバラバラに退助を探す。それぞれ走りながら必死に

功「退助ーーーー!」

由美子「退助! どこーーーー!？」

蜜柑「お兄ちゃーーーーん!？」

しばらく走り回り、功が退助を見つける。退助、鞆を持って信号待ちをしている。

功「おい!! 退助!!」

退助「父さん!？」

功「なにを考えてるんだ、戻ってこい」

退助、泣きそうになりながら

退助「いや、戻らない。この家にいたら、俺は漫画家になれない」

功「何を言ってるんだ!？」 退助、俺はお前に伝えたいことが」

功、退助を捕まえようとすが

退助「うるさい!! 来るな!!」

退助、功を突き飛ばし、走り出す。

功「待つんだ!!」

功と島縞和弘（88）が机を挟んで会話している。島縞はノー
トを見ながら唸っている。功はふんぞり返って不機嫌さを
隠そうともしない。

島縞「先生、この場面なんですが」
功「なんだ」

島縞、立ち上がり急にテンションが上がる。

島縞「素晴らしいです！！」
功「うん」

島縞「母親が死んだ場面で涙を流すシーン、ぐっときました！！」
功「ああ、その場面な。142ページの…」

島縞が手で遮る。

島縞「みなまで言わないでください！ 主人公がガパオライスを食べる
…あのシーンですよ？」

功「わかるか」

島縞「ええ、あそこでタイにいる母親のことをふと思い出すんですよ。

それぐらい主人公にとってガパオライスは尊い存在だったんだ…！

あ！！ まさかあのシーンも伏線だったのか」

功、ニヤリと笑う。

功「気づいたか」

島縞「王将の…チャーハン…！！」

功「ビンゴだ」

島縞、震えだす。

島縞「そうか、そうだったのか。チャーハンを食べてしっくりきてない
描写すらも伏線だったとは。まさしく心情描写の天才！ ストーリー
テリングの魔術師！！」

功「少しわかりづらかったかな？」

島縞「いえ、そんなことはありません！ そんなことを言うやつがいた

ら僕がぶっとばしてやりますよ!!!」

功「人間は言葉に表出するものだけがすべてじゃないというのが私の信条だ」

島縞「ええ、まったくの同感です」

島縞のテンションが振り切れていく。

島縞「こう：なんていうのかな。全体的に内面に秘められたエネルギーがすごいんですよ。こういう人情に訴えかけるシナリオなのに登場人物の感情が外に出てこないのは、人によってはわかりにくいというやつもいるでしょう。だが僕はそれに異論を唱えたい!! 行動で示されるものが人のすべてではない!! 先生は人付き合い不器用な面はありますが、それを僕は悪いことだとは思いません。要はまわりがくみ取ればいいんです。最近はライトにわかりやすい作品が世間で求められていて、やれ異世界に飛んでみただの、やれ最強のなんたらだのといった作品がはびこっています、僕は今こそこういった重厚な作品を世間は読むべきだと感じています!! まあ、結論をいうと先生こそはこの荒涼とした文学界に革命を起こす……」

功「あ、そろそろ時間だから帰ってくる？」

功が下りてくる。

由美子「さっき和弘さんが慌てて出ていったわよ。打ち合わせはもういいの？」

功「ああ、興奮して出ていったよ。彼は俺の作品をよく理解してくれている」

退助「さすが父さん。また俺にも読ませてよ」

蜜柑「えー！ ずるい、私も読みたいよー」

功「ははは、また今度な」

由美子「ふふ、仕事が順調そうで何よりだわ」

功「理解者が多くて助かる」

功、テーブルに座る。

功「今日は焼きそばか」

由美子「カツ焼きそばよ」

功「そうか。いただきます」

功、もくもくと食べ始める。

功「そういえば退助」

退助「なに？」

功「ちゃんと勉強は進んでるのか？」

退助「当たり前じゃん。いまは勉強に集中する時期だからね」

功「ああ、それでいい」

退助「大学に合格して、地に足ついた生き方をするよ」

功「成長したな、お前も」

退助「ごちそうさま、いつてくるよ父さん」

功「頑張れよ」

退助、功に手を振ってリビングを出ていく。

由美子「退助も立派になったわね」

功「俺たちの息子だからな、それより蜜柑」

蜜柑「なに？」

功「お前、風紀委員になったんだってな」

蜜柑「うん、最近化粧する子が多くてさ、取り締まるの大変なんだよ
ね」

功「お前たちの年で化粧をするなんて、肌に毒なだけだ。何を考えとる
んだ」

蜜柑「まったくだよね。最近流行ってるオルチャンメイク？　っていう
のも何がいいんだか」

功「お前はやるなよ」

蜜柑「やるわけないじゃん、ごちそうさま！」

蜜柑も出ていく。功、ビールを飲む。

功「うちの子は手がかからないな」

由美子「あなたのおかげよ」

功「ありがとう。；ずっとこんな日々が続けばいいのにな」

由美子「どうしたの、急に」

功「；時々、恐ろしい夢を見るんだ」

由美子「夢？」

功「何もかもがうまくいかない、そんな日々が続く夢だ。俺の気持ち
伝わらなくて、すべてが空回りして、最終的にお前たちを失う。そん
な夢だ」

由美子「；お父さん、それは夢よ」

功「お前たちは俺からいなくならないよな？」

由美子「当たり前じゃない」

功「ありがとう」

由美子「私たちはいつまでもあなたの味方よ。この日々は変わらない」

由美子、そっと功を抱きしめ、リビングを出ていく。

功「ありがとう」

功、一人になり、リビングを出ていく。

12 高柿家リビング(昼)

功が下りてくる。

由美子「さつき和弘さんが慌てて出ていったわよ。打ち合わせはもういいの？」

功「ああ、興奮して出ていったよ。彼は俺の作品をよく理解してくれている」

退助「さすが父さん。また俺にも読ませてよ」

蜜柑「えー！ ずるい、私も読みたいよー」

功「ははは、また今度な」

由美子「ふふ、仕事が順調そうで何よりだわ」

功「理解者が多くて助かる」

功、テーブルに座る。

功「今日は焼きそばか」

由美子「カツ焼きそばよ」

功「そうか。いただきます」

功、もくもくと食べ始める。そこでチャイムが鳴る。

由美子「誰かしら？」

退助「配達じゃないの？」

功がインターホンの映像を見る。

功「女…？」

退助「女？」

由美子「誰かしら？」

蜜柑「ちよっと、なんか怖いんだけど」

功「俺が出てくる」

由美子「気を付けてね」

功、玄関に向かう。

功の声「おい！ 勝手に入るな！」

謎の女（謎）がリビングに入ってくる。

由美子「きゃあ！」

蜜柑「なに！？ なに！？」

謎の女「…ひどい有様ね。掃除してないの？」

謎の女、周りを気にすることなく、功に話しかける。ふらつき、挙動がおかしくなる功。

功「なんだ、どういうことだ」

由美子「お父さん、大丈夫！？」

退助「なんだお前！ 出ていけよ！」

謎の女「ちよっと大丈夫？」

功「…誰だお前は」

謎の女「え…？」

功、息が荒くなり、頭を抑える。由美子と蜜柑と退助が功に駆け寄る。

蜜柑「お父さん、しっかりして！」

功「家族に手を出すな」

謎の女「…どういうこと？」

謎の女が功に近づいていく。

功「来るなあ！！」

謎の女「お父さん！！」

功「うわああああああああ！！」

照明が変化。響き渡るノイズ音。やがて鳴り響く衝撃音。人の喧騒。救急車の音。やがて音が止み、うずくまっている功。謎の女と退助、由美子、蜜柑がそれを心配そうに見ている。

謎の女「大丈夫？」

蜜柑「お父さん、あまり無理しないで！」

由美子「病院に行ったほうがいいんじゃない？」

功「大丈夫だ…」

謎の女「話には聞いていたけど、かなり精神的に追い込まれてるようね。早くきていけば…」

功「さっきからなんなんだ、お前は。俺は何もおかしくない！ それにお父さんって！俺はお前なんて知らないぞ！」

謎の女「私は蜜柑よ！！」

蜜柑「え？」

功「蜜柑…？ 待て、蜜柑ならそこにいるじゃないか」

功が蜜柑を指さす。

謎の女「ちよっと待って、お父さんには何が見えているの？」

謎の女が功にすがりつく。

謎の女「目を覚ましてよ！ 私は高柿蜜柑！10年前、家から出ていっ

た蜜柑よ！」

退助「なに？ どういうこと？」

蜜柑「違う。蜜柑は私よ、お父さん」

功「10年…。10年だと…!!？」

謎の女「ごめんね、本当にごめんね。私、何もわかってなかった。お兄ちゃんが亡くなって、お父さんもお母さんも大変だったのに、自分のことしか考えてなかった！」

功「退助…亡くなって…ああ…ああ」

功の脳内を現すかのように、様々な声や音が鳴り響く。暗転。

13 病院―遺体安置室（昼）

遺体安置室に横たわる退助。由美子と蜜柑が退助にしがみついで泣きじゃくっている。遅れて功が安置室に入る。

功の顔から感情を伺い知ることにはできない。功、退助の遺体に近づき、顔にかけられた白い布を外そうとする。何か声をかけようとするが、その声は出ず、布を元に戻す。

14 高柿家ーリビング(夜)

ここから残された家族の日常が断片的に表現されていく。暗転は挟まず、演技で切り替えていく。椅子に座り、食事をする功と由美子と蜜柑。会話はなく、みな表情は暗い。蜜柑、椅子から立ち、出ていこうとする。

功「蜜柑、どこにいくんだ」

蜜柑「彼氏の家」

功「何時だと思ってるんだ。自分勝手なことばかりするな」

蜜柑「うるさいな！ 関係ないだろ。いつもいつもまずい飯ばっか食わされるこっちの身にもなれよ」

功「なんだと…！」

功、立ち上がって蜜柑にビンタをする。

功「子供はな、親の言うことを黙って聞いてればいいんだ」

由美子「ちよっと、お父さん！」

蜜柑、にらみつける。

蜜柑「なにそれ」

功「なんだと？」

蜜柑「お前のせいだろ」

由美子「蜜柑、やめなさい！」

功「なにがだ」

蜜柑「お前があんなことを言わなけりや、兄ちゃんは死ななかつた！！」

蜜柑、由美子の方を見る。茫然とする功と由美子を置いていき、蜜柑が出ていく。

由美子「蜜柑、待ちなさい！」

追いかけていく由美子。

功「俺の…せい」

功の後ろに退助の姿がぼうつと浮かび上がる。功、後ろを振り返る。退助と相對する。退助は無言で功を見つめている。

功「退助：？」

退助、去っていく。

功「待ってくれ！ 退助！」

場面切り替わる。

× × ×

島縞が現れ、功に話しかける。

島縞「先生、編集部で会議がありました：今度の作品についてなのが」

功「どの部分だ」

島縞「いえ、書き直しじゃありません」

功「なに？」

島縞「その：編集長の交代で方針が変わりまして、原作は別の方にお願いをしようかと。正式に書面で連絡をさせていただきますが：」

功「おい、待て。そんな勝手な話があるか！ こっちがどんな思いでこの作品を書いてきたか！」

島縞「ご息を亡くされて大変な状況なのはわかります！ ですが、僕にはどうすることも」

功、島縞にすがりつく。

功「ふざけるなふざけるな！ お前らは人間じゃない！ 二度と顔を見せるな！！」

功、崩れ落ちる。

島縞「：失礼します」

功「うわああああ：！！」

床にひざまずき、泣きじゃくる功。そこに退助と蜜柑が現れ、功に声をかける。

退助「泣くなよ父さん」

蜜柑「お父さんの作品、面白いのにねー！」

功「俺は：どうすれば」

退助「俺たちが一緒にいるよ」

蜜柑「私たちはいつだってお父さんの味方」

功「俺は：悪くない」

退助「あたりまえじゃん」

場面切り替わる。

× × ×

寝ている功。由美子が退助が描いていた漫画の原稿を持って功に話しかける。

由美子「ねえ、あなた」

功「なんだ」

由美子「今日、退助の命日なのよ。掃除したら退助が昔描いてた漫画を見つけてね」

功「もういい」

間。

由美子「え？」

功「もう、退助のことは考えるな」

由美子「どういうこと？ ねえ、あなた最近変よ」

功「おい、どうしたんだ」

由美子、功にすがりつく。

由美子「しっかりしてよ！ 退助が死んで、仕事もなくなって、蜜柑ま

でいなくなつて！ ここであなたまでおかしくなつたら」

功「離せ！！」

功が由美子を投げ飛ばす。

功「お前こそいい加減メソメソするのはやめろ！ いつもいつも俺を責めるような物言いばかりして！！」

由美子「いつ私がそんなこと言ったのよ、あなたがそんなだから！」

由美子、言いよどむ。間。

功「なんだ」

由美子、黙ったまま。

功「お前まで俺が悪いっていうのか」

由美子「そうね。今のあなたは優しくもなんともない…。それこそ…ただの悪しき作家よ」

由美子、去っていく。

功「おい待て！ 由美子！？」

功、一人になり、立ち尽くす。テーブルに座る。静寂の時間が過ぎていく。功、ふとテーブルに置かれた漫画に目をやる。それを読もうとする功、だがすぐに閉じる。テーブルを叩き、叫びだす。怒りなのか悲しみなのかどちらともとれない叫び。叫びおわり、功は机に突っ伏すような形になる。そして静止。長い時間が経過したかのような演出。やがて、退助が現れる。

退助「父さん」

功が起きる。

功「退助…？」

蜜柑と由美子も現れる。

蜜柑「何してんのお父さん、もう朝ごはんだよ」

由美子「今日はカツパスタよ」

蜜柑「もう無茶苦茶じゃん！」

由美子「退助が受験に勝つまで続けるからね！」

退助「プレッシャーが…」

功、茫然と家族を見つめる。

功「なんだ、これは」

由美子「お父さん、どうしたの？」

蜜柑「早く食べようよ」

退助「父さん」

功、笑いだす。

由美子「どうしたのそんなに笑って」

蜜柑「なんか怖いんだけど」

功「少し：夢を見てたみたいだ」

由美子「もう、仕事のしすぎなんだから」

功「すまんすまん」

由美子「はい、それじゃあ」

全員「いただきます」

暗転。

15 高柿家ーリビング(昼)

功「ああ、そうか…そうだったのか」

謎の女「お父さん…、思い出してくれた？」

功「ああ、お前は…本当の蜜柑なんだな」

謎の女改め蜜柑(大人)「そうだよ、お父さん…」

功「すまん」

「功、ふらふらと立ち上がる。

蜜柑(大人)「え」

功「俺は…おまえの父親じゃない」

蜜柑(大人)「なんで」

功「ここにいる退助、蜜柑、由美子こそが俺の家族だ」

退助、由美子、蜜柑が功に寄り添う。

蜜柑(大人)「目を覚まして！そこには誰もいない！全部、全部お父さんの妄想なんだよ！」

功「例えそうだったとしても！ここには俺が求めていたすべてがある！！俺はもう、何もなくなたくないんだ！もう俺のせい

で誰かが離れてしまうのは…嫌なんだ！」

蜜柑(大人)「それで私がいなくなっても？」

功「それは…」

蜜柑(大人)、功を抱きしめる。

蜜柑(大人)「私ね、結婚してるの」

功「え」

蜜柑(大人)「結婚して、子供ができて…、お父さんやお母さん…お兄ちゃんのことを思い出すようになった。お兄ちゃんがいな

くなつて、お父さんたちがどれだけ辛い思いをしていたのか、私も子供ができて本当にわかった気がした。だから戻ってきたの。

今更顔を出して何だっと思われるかもしれないけど、でも、お父さんたちに謝りたいって…だから」

功「…お前」

蜜柑(大人)「…ごめんなさい」

功、振り返り、蜜柑と由美子と退助の顔を見る。

功「俺は…」

蜜柑「そっか。私、結婚したんだ」

由美子「蜜柑…」

蜜柑「子供は男の子かな、女の子かな。どんな顔してるんだろ」

由美子「きつと、かわいい子よ」

功「…そうだな」

蜜柑「でも見られないんだよね。私はずっと子供のまま」

功、幻の蜜柑を見て、苦悩の表情を浮かべる。幻の蜜柑はそれを手で静止する。

蜜柑「来なくていいよ、お父さん」

功「でも」

由美子「大丈夫よ」

功「由美子」

由美子「あなたが前に進みたいなら、行きなさい。私たちはあなたの想いそのものだもの」

蜜柑「さびしいけどね」

由美子「仕方ないわ」

功「ああ…すまない…」

由美子「幸せになってね」

蜜柑「私と、私の子供。大事にしてあげてね」

由美子・蜜柑「ばいばい、お父さん」

幻の由美子、蜜柑が舞台を去る。退助は立ち止まったまま。功、蜜柑（大人）を抱きしめようとする。

退助「何幸せになろうとしてるんだ？」

功の動きが止まる。退助がどすぐろい感情を込めた眼差しを功に向ける。功、震えてうずくまる。

蜜柑（大人）「お父さん！？」

退助「あんた、俺を認めようとしなかったよな？俺が漫画家になりた

いって気持ちを否定して、そして追い詰めた」

功「そうだ…俺が退助を追い詰めたんだ」

退助「お前が」

功「俺が」

退助「俺を殺した」

功「あいつを殺した」

蜜柑（大人）「違う！ あれは事故だったの！ お父さんはお兄ちゃんに伝えたかった思いがあったんじゃないの！？」

功「俺が伝えたかったこと…」

退助「今更何の気持ちがあつたっていうんだ。あんたがどう言いつくろおうと俺は死んだ。俺はあんたに理解されることなく、人生を終えたんだ」

功、頭を抱え、蜜柑（大人）を突き飛ばす。嗚咽しながらキッチンの方へ。

蜜柑（大人）「お父さん！？」

退助「俺は生きたかった。父さんに理解されたかった。なのにあんたは新しい人生を歩むのか？」

功、キッチンに置いてある包丁を手取る。そして自分の首に包丁を突きつける。

蜜柑（大人）「お父さん、やめて！」

功が自分の首に包丁を刺そうとする。そのとき、蜜柑（大人）が鞆から紙を取り出して広げる。その紙は退助が子供の時に描いた、功の似顔絵である。功、それを見て、静止する。

功「それは…」

蜜柑（大人）「覚えてる…？」

功「ああ、覚えてるさ…」

蜜柑（大人）「兄ちゃんが描いたお父さんの似顔絵のこと、兄ちゃんはずっと覚えてたよ」

功「嘘だ、嘘だ。そんなの」

蜜柑（大人）「お兄ちゃんは、お父さんなりに自分を応援してくれたんだろうって。そう言ってた。お父さんだって、お兄ちゃんのこと大事にしてたから、部屋にずっと飾ってたんでしょ。二人の気持ちは通じ合ってたのにその気持ちを否定して死ぬなんて、そんなの悲しすぎるよ！！！！」

功「俺は…」

功、包丁を捨てる。そして幻の退助に向かって土下座をする。

退助「どういうことだ」

功「…すまなかった」

退助「なにが」

功「お前を、愛してた」

沈黙。功、言葉を続ける。

功「由美子も蜜柑も、家族みんなが大切だった。ただそれだけを伝えればいいだけだったのに。俺にはそれができなかった…」

蜜柑（大人）「お父さん…」

退助「そうだ。だからあんたは死ぬべきなんだ」

功「違う…お前が俺に望んでいることはそうじゃないだろう」

退助「じゃあ、なんだ」

功「お前は俺に…向き合ってほしかったんだ。漫画家を目指しているお前に」

そして功がテーブルに置かれた漫画を手取る。

功「お前が死んでからこの漫画も読めなかった。自分の不甲斐なさを突きつけられているようで…」

功、震えながら漫画を開く。

退助「父さん…」

退助、沈黙する。長い間。

功「ああ…うまいなあ…」

蜜柑「お父さん…私にも読ませて」

功「…ああ」

退助、功の前から姿を消す。舞台には蜜柑（大人）と功だけが残り、暗転。

功と島縞が向かい合っている。

島縞「いやあ、しかし。急に先生から漫画を見てほしいと連絡を受けたときは驚きましたよ」

功「まさか受けてもらえるとは思わなかった」

島縞「当たり前ですよ、僕は先生の一番のファンなんですから」

功「あの時は本当に、すまなかった」

島縞「やめてください、非があるのはこちらものです」

功「それで：漫画の方は」

島縞「面白いですよ。私が保証します。これは世に出すべき作品だ」

功「そうか。本当によかった、ありがとう」

島縞「絵といい、漫画の構成といい、粗削りながら可能性を感じます。

あの、これは先生が描いたんですか？」

功「いや：死んだ息子の遺作なんだ」

島縞「あ：すみません」

功「最後のセリフだけ抜けていてね。私がそれを考えた。これでよかつ

たのか、今でもわからんが」

島縞「大丈夫ですよ」

功「ありがとう」

島縞「早速漫画部門を担当している編集者にあたってみます。任せてく

ださい、これでも次期編集長なんですよ」

功「頼むよ」

島縞「先生の次回作も：今度お願いできればと思ってます」

功、苦笑する。

功「考えておこう」

島縞「はい、では」

17 高柿家ーリビング(夜)

功が原稿を持って、リビングに下りてくる。蜜柑(大人)がテーブルに座っている。

蜜柑(大人) 「遅いよ、もうご飯できてる」

功 「ああ、すまん」

蜜柑(大人) 「打合せどうだった？」

功、原稿を持ってガッツポーズし、

功 「ああ、前向きに考えてくれるそうだ」

蜜柑(大人) 「そうなんだ、よかった」

功 「お、今日は焼きそばか」

蜜柑(大人) 「簡単なのでごめんね」

功 「いつもすまん」

蜜柑(大人) 「いいのいいの。お父さんが元気になるまでの間だからさ。

子供がいるから、夜にはまた家帰るけど」

功 「十分だ、ありがとう」

蜜柑(大人) 「あれから幻覚は見えないの？」

功 「ああ」

蜜柑(大人) 「やっぱり、さびしい？」

功 「どうかな。だが、後ろばかり見てられない」

蜜柑(大人) 「そっか」

間。

蜜柑(大人) 「ねえ」

功 「ん？」

蜜柑(大人) 「この前ね、お母さんに会ったんだ」

功 「…そうか。元気にしたか」

蜜柑(大人) 「うん。あれで遅い人だから。お父さんのこと、気にしてたよ」

功 「…そうか」

蜜柑(大人) 「また、3人で話せる日が来るといいね」

功 「ああ」

功と蜜柑(大人)、ごはんを食べ終わる。

蜜柑（大人）「（腕時計を見て）あ、もうこんな時間だ。ごめん！ 私
もう保育園に迎えにいかないよ」と

功「片付けておくから。いってきなさい」

蜜柑（大人）「ごめんね！」

蜜柑（大人）が慌てて出ていく。功、皿を持ってキッチンにも
っていく。功、テーブルに戻る。ふと、退助が描いた原稿を手
に取り、読みだす。後ろから退助が現れ、話しかけてくる。

退助「俺の漫画、面白かっただろ」

功「昔から才能があつたもんな」

退助「そんな風に思ってたのか」

功「ああ」

退助「それなら最初からそう言ってくれよ」

功、神妙な面持ちになり、

功「すまん」

退助、笑顔になり

退助「いいんだ、俺こそごめんな」

功、振り返る。

退助「その言葉、母さんにも伝えてやれよ」

退助、出ていく。

功「そうだな」

功、携帯電話を取り出して、かける。

功「…もしもし、由美子か。話したいことがあるんだが」

暗転。

完